

講演会の趣旨

本学へのご入学をお祝いし、熱烈に歓迎いたします。
私は本学人権教育研究委員会委員長の八木です。同時に、
人権教育研究センター所長を兼任しています。

本学は禅仏教の精神と人権拡張の課題を教学の柱に設定しているという点で全国的にも非常にユニークな大学であります。入学式の際にお渡しした『人権教育研究センター報』にも記載しておきましたように、前期と後期あわせて16コマをCDC基礎科目「人権」として設定し、うち2科目4単位を必修化していますが、そのような取り組みも全国的に見てかなり突出したものではないかと自負しています。また、教員免許取得希望者には「同和教育論」も必修科目です。さらに、新入生オリエンテーションのプログラムの中に「人権講演」のコマを組み入れている大学もそう多くはないと思います。

このように本学が人権問題に力を注いでいるのは事実ですが、しかし、実際問題としてはかなりの程度までタテマエ化していることも否定できません。このタテマエをどうにかしてホンネに近づけようと私たちは日々努力

しているつもりですが、今日からは新入生のみなさんにもタテマエをホンネ化していく作業に加わっていただかねばなりません。

昨日の入学式で学長は「人間の尊厳」について語りましたが、私はもう少し具体的に、みなさんがそれぞれ一人ひとり「権利性の主体」であるということに自覚的になっていただきたいと申し上げたいと思います。自己の人権に自覚的でない人がどうして他者の人権に想像力を及ぼすことができるだろうか、ということをお願いしたいのです。大学はある程度まで自由で民主的な空間ですが、そのなかには抜き差しならない権力関係が存在しています。教職員と学生に配分された権力は均等ではありませんし、性の違いそれ自体が権力の不均等配分を具現化することもあります。みなさんが、そのような大学空間の中で、理不尽にも不当な取扱いを受けることは絶対はない、とは残念ながら言い切れません。そのような場合、どうかみなさん、泣き寝入りすることなく、異議を申し立ててください。少なくとも人権教育研究委員会と人権教育研究センターは、みなさんを見殺しにすることはありません。私たちは最後の最後まで、みなさんを「権利

性の主体」として尊重し、みなさんの利益の側にたって活動するということを約束いたします。

今日は堀江有里先生から「ディスコミュニケーションと暴力・セクシュアル・ハラスメントを中心として」と題する講演を受けます。残念ながら、本学では昨年、職員間のセクシュアル・ハラスメント事件が発生しました。また、大学の全構成員を対象にした調査によって、本学にはいくつかのセクシュアル・ハラスメント事件が過去に発生していた事実が判明しました。残念ながら、本学は他の多くの大学と同様、なおも安全で快適な大学になりえていないと言わざるをえない状況にあります。このように、セクシュアル・ハラスメント問題は本学にとって今も重要な課題であり、新入生のみなさんにも一緒に考えていただきたいと思って、このような講演を設定したわけです。

堀江先生は本学非常勤講師として、CDC基礎科目「人権」のなかの「セクシュアリティ研究」という授業をはじめ、いくつかの科目をご担当いただいています。また、日本基督教団の牧師もなさっています。それでは、堀江先生をご紹介します。

2003年4月4日

花園大学人権教育研究委員会委員長・人権教育研究センター所長（文学部教授）

八 木 晃 介

ディスコミュニケーションと暴力

——セクシュアル・ハラスメントを中心として——

堀 江 有 里

(花園大学非常勤講師)

◆ はじめに

皆さん、こんにちは。まずは、ご入学おめでとうございます。皆さんは、昨日の入学式から新しい生活が始まり、様々な思いを持ちながら、ここにいらっしゃることと思います。

先ほどご紹介いただいたように、私はこの学校で非常勤講師として、「人権」科目の「セクシュアリティ研究」を担当しています。「セクシュアリティ研究」といっても、多くの方々はあまり聞いたことがないと思いますが、おもに「同性愛者の人権」について講義を進めています。今日はその話ではなく、「セクシュアル・ハラスメント」についてお話したいと思います。

◆ 私たちの生きている〈いま〉

このところ、テレビを見たり、新聞を読んだりしていると、いろいろと気になることがあります。アメリカ合州国によるイラク攻撃のことです。先ほど、皆さんに「おめでとうございます」と言いましたけど、「おめでとう」という表現をするのが憚られるような情勢が続いています。今日（4月4日）、日本時間の午前3時頃、イラクの首都バグダッドから10キロくらい離れたところに米軍が到着したというニュースが流れてきました。「これは米軍の情報である。確認はまだされていない」というNHKニュースの情報でした。国際社会の合意がないままに、イラクへの武力行使を咎める声がたくさんあるにもかかわらず、アメリカはイギリスと一緒にイラクに侵略を始めてしまったわけです。それに対して、反戦運動がいろんなところで起こっています。私たちはそのようなニュースを毎日、受け取っているわけですが、ここで忘れてはいけないことがあります。いま、私がいちばん気になっていることを二つ、挙げておきます。

イラクへの攻撃が始まった、戦争が始まった、ということに対して、いつの間にか「イラク戦争」と名前が付

けられる状況になりました。「戦争を止めよう」という声が、世界的に、大きく上がっているのは大切なことかもしれません。しかし、何だかこれではその日（3月20日）から戦争が始まったように聞こえる——それまではイラクの人々は平穏に生活をしていたように聞こえる——のではないかと思います。実際には、イラクへの米軍の空爆は、その日からではなく、その前からずっと続いているわけです。南部の地域では、一週間のうちに、何十個も何百個も爆弾が落とされ、人々のいのちが奪われてきました。私たちのもとにはニュースとして大きく報道されないかもしれないけれども、そういうことが起こっていた。だからイラクの人々にとっては、日常の延長線上に、いまの「戦争」と呼ばれるものがあるということが言えるのではないかと思います。いつの間にか、「イラク戦争」と名づけられた時点で、爆撃がつい最近始まったような錯覚を私たちは起こしてしまっているのではないか。これが気になることの一点目です。

もう一つは、情報の問題、とくに私たちのもとに届けられる映像の問題です。皆さんももちろんご承知かと思いますが、私たちが新聞やテレビで得る情報は9割以上、

ほぼ100%、アメリカからの情報です。「サダム・フセインという独裁者が悪いことをしたから自分たちが攻撃しなければならない状況になったんだ」とブッシュ大統領は何度も言っていますが、実際には、大量破壊兵器を世界で一番多く持っているのも、生物兵器を持っているのもアメリカです。まずは、ブッシュ大統領が「大義名分」として掲げているもの自体を、私たちは疑ってかかる必要があるということです。

また、そのほかにもイラクでの情報がアメリカを経由して、私たちのもとに届けられます。ここで私が気になるのは、「従軍記者」、「軍事評論家」、米軍の映像という三点セットです。テレビでは時々、「従軍記者」による中継映像が流れてきます。米軍と一緒に移動している人たちのルポです。この「従軍記者」という存在自体が非常に象徴的なものだと思いますが、かれら／かのじょらは、米軍に許可を得て、そして守られて取材をしている人々です。「従軍記者」の中継を受けて、たくさんの「軍事評論家」と呼ばれる人々のコメントや解説が流されます。かれらの分析は、あくまでも米軍の軍事上の戦略だったり、米軍の今後の方針であったりするわけです。

これらの中継や解説と同時に、映像が流されます。空母から飛び立っていく戦闘機だったり、その戦闘機に爆弾が積み込まれている映像。こういう映像を見せられると、私たちの日常から遠く離れたところで起こっていることだと錯覚してしまうことになるのではないかと思います。十年前の「湾岸戦争」でも言われたように、現実に行っている爆撃をゲーム感覚でとらえてしまう危険が伴うわけです。

◆ 〈暴力〉の背後にあるもの

もちろん、起こっている事柄に対して、私たち日本に住む人間も第三者ではないということも皆さんもご承知かと思います。ペルシャ湾には自衛隊の艦隊が派遣されています。米軍の空母キティホークが行っていますが、それに燃料を補給したり、空母のメンテナンスをしたり、ということにも、日本の税金が使われているわけです。私たちの支払っている税金が、直接的に戦争に結びつくような形で使われているということです。私たちの日常がそこに結びついている、線でつながっているということを、私たちはいつのまにか忘れ去っているのではない

か。そのようななかで、いつのまにか慣らされていってしまう現実というのがあると思うわけです。

そうやって私たちの心のなかに少しずつ埋めこまれて、刷りこまれている現実がある。

「戦争」というのは、ある意味で非常にわかりやすい〈暴力〉の形態のひとつです。今日のテーマである「セクシュアル・ハラスメント」というのは、非常につながりにくいように思われるかもしれないけれど、やはり〈暴力〉の形態のひとつです。この形態もまた、私たちが生まれ育っていくなかで、無意識のうちに埋め込まれ、刷り込まれていった価値観として内面化したものを土壌として、生み出されていくものです。つまり、慣らされ、内面化しているからこそ、それが〈暴力〉であることに、なかなか気づくことのできない状況がつくられてしまうわけです。

◆ 「セクハラ」という言葉をめぐって

多くの方々は「セクシュアル・ハラスメント」という言葉を聞いたことがあると思います。この言葉は「性的いやがらせ」と日本語で訳されることもあります。しか

し、「いやがらせ」というと、どうも軽視されるニュアンスを伴ってしまう。最近では「性的脅し」と訳され始めてもいます。

10年余り前(1989年)、セクシュアル・ハラスメントの略語の「セクハラ」という言葉が流行語大賞に選ばれたことがありました。流行語大賞に選ばれるということは、それなりに普及した言葉であったとも言えます。しかし残念ながら、だからといってセクシュアル・ハラスメントというものが、きちんと認識されたわけではなく、「流行」したということは、つまり、マスメディアで多くとり上げられたということの意味をしていますし、それゆえに半分以上、嘲笑の対象になってしまったということが言えると思います。嘲笑の対象になり、「セクハラ」という言葉だけが、ある意味で独り歩きしてしまう。そうすると、起こっている事柄が深刻に受け止められないという状況が生まれてくるわけです。そして、その深刻に受け止められない状況は、いまでも続いていると言うことができます。

先日、インターネットの検索エンジンで「セクシュアル・ハラスメント」と「セクハラ」の両方を検索してみ

ました。そこにはいくつものサイトが紹介されています。セクシュアル・ハラスメントの被害にあったときの相談窓口、「セクシュアル・ハラスメントを防止するにはどうしたらいいか」というマニュアル、法律や事例など、です。しかし、そのようなサイトに紛れるかたちで、アダルト・サイトもヒットするわけです。アダルトビデオや、ポルノ雑誌などの性産業の枠のなかで、「セクハラ」がひとつの「シリーズもの」として展開されているということです。「セクハラ」がネタになり、「商品」になっている。

一方で「セクシュアル・ハラスメントというのは犯罪だ」と告発や啓発をする人々がいる。もう一方で、「セクハラ」が商品化され、売り物として売り出されている現実がある。これがまだ、セクシュアル・ハラスメントが多くは嘲笑の対象にしかならず、深刻に事態が受け止められていないという現実を物語っているのではないかと思うわけです。

◆ 「セクシュアル・ハラスメント」とは何か

「セクシュアル・ハラスメント」と聞くと、非常にり

アリティのある人と、全然何のことかさっぱりわからんという人と、両極端に分かれることが多いということも私も実感してきました。

セクシュアル・ハラスメントとは何か。簡単に言ってしまうえば、一番広い定義では「相手の望まない性的な行為、言葉、振る舞い」を指します。抽象的に聞こえるでしょうか。要は、対する相手が望まない、「性的な行為、言葉、振る舞い」を押しつけること、強要することが、問題なわけです。そこには、性暴力、レイプ（強かん）の問題も含まれますし、また女性に対して「女らしさ」を強要したり、性別によって役割分担を割り当てて強要することも含まれます。

皆さんは入学式のときに、花園大学の「セクシュアル・ハラスメント」のリーフレットとガイドラインをもらわれたと思います。そのリーフレットには、たとえば、こんな例が載っています。「教員から女性だからといって補助的な役割しか与えられない」とか「ゼミのコンパで女性にお酌をさせられる」とか「女らしさ、男らしさという一つの価値観を押しつけられる」というものです。これらもセクシュアル・ハラスメントに含まれるわけで

す。

「女だから」、もしくは「男だから」と「こうしなさい、ああしなさい」と役割を強要されたり、限定されたりすることと、性暴力や強かん（レイプ）の問題は、開きがあるように思われる方が多いと思います。セクシュアル・ハラスメントという言葉はそれらを全部ひっくるめて表す言葉です。つまり強かん（レイプ）の問題と、「女だからこうしなさい、ああしなさい」という性別による規範や役割分担の強要の問題とは全然別のことではなく、つながっている問題なのだというのが、セクシュアル・ハラスメントという言葉が表している事柄です。つながりが見えないために、嘲笑の対象になったり、「わかりにくい」と言われることが多いわけです。

◆ 「わかりにくさ」の背景

私自身も、いま、セクシュアル・ハラスメントの訴訟に関する支援活動に少しかかわっているのですが、少しずつ啓発活動が進み、セクシュアル・ハラスメントが起こった、対策をしていかなければならないというときに、何人かの男性の方からこういう質問を受けました。「ど

これまでやったらセクシュアル・ハラスメントなのですか。基準は何なんですか？」と。その質問が表していることは、セクシュアル・ハラスメントの「わかりにくさ」だと言われることが、しばしばあります。

先日も、花園大学の非常勤講師の男性からこういう意見を聞きました。「もし告発されたら、告発された人のプライドが傷つくのではないか。だからこそ、加害者だと言われても、本人は簡単に認められないのではないか」ということでした。その人の言いたいことは何だったのか。ここで考えたいのは「基準は何か」とか「告発されたらプライドが傷つくのではないか」という問いは何を表しているのか、ということです。自分が被害にあうということは、まず予測しない。加害者となる可能性も、予測しない。「基準」を求める視点というのは、むしろ、その人自身が「もしかしたら告発されるかもしれない」という不安を抱えているということですよね。「僕も危ないんじゃないか」と思うから「基準はどこにあるのですか。そんな告発されたらプライドが傷つくのではないですか」と言ってしまうと思います。

つまり、問題は、セクシュアル・ハラスメントの概念

自体の「わかりにくさ」というよりも、このような疑問をもつ人々が、セクシュアル・ハラスメントという言葉が指し示すものを「わかろうとしていない」という態度を無意識であれ、もっているということです。このような場では、被害者が告発しても、それは「被害」と認識されず、告発された側が自らを「被害者」として位置づけてしまうという「逆転現象」が起こってしまうわけです。

◆ 権力関係

では、なぜ「告発されること」への恐れにだけ意識が向いてしまうのか。なぜ、被害者の状況に思いを寄せることができないのか。ここで先ほどご紹介した、セクシュアル・ハラスメントの定義に戻ってみましょう。セクシュアル・ハラスメントとは「相手の望まない性的な行為、言葉、振る舞い」ということです。「相手が望まない」という部分が重要なポイントです。

つまり、「望まない」にもかかわらず押しつけられること、一方で強要している側が「強要している」ということに気付かないのは、そこに「権力関係（力関係）」

があるからだと考えられます。多くはセクシュアル・ハラスメントの加害者は男性、被害者は女性です。もちろん、被害者が男性で加害者が女性の場合もありますが、ケースとして多いのは、男性が加害者で、女性が被害者の場合です。加害者の男性たちは「相手が望まないということに気づけない」、これが一番問題なのだと思います。

「権力関係」は、私たちの生活の様々な場面で身近にあるものです。例を挙げておきましょう。私が大学を卒業したのは10年以上前なので参考になるかどうかわかりませんが、私は、大学生時代、体育会にいたので、上下関係は非常に厳しいものでした。先輩に対してはものが言えない。口答えするといろいろな懲罰が待っている世界にいました。そのなかで、関係性が作られていくわけです。その厳しい上下関係を無意識のうちに内面化していくわけです。クラブの上下関係のなかでも権力関係が作られてしまっているがゆえに、先輩が後輩に対して、相手に望まない状況にあるのを想像できない、イメージすることができないという状況が生まれてくるわけです。

また、権力関係は上下関係だけではないですよ。人

数も同様です。同じ意見の人がたくさんいて、一人だけ違う意見の人がいたら、一人の人は多くの人たちに対して「それは違うんじゃないの？」となかなか言えない状況に置かれると思うんですね。そういうところでも力関係は起こっているわけです。

◆ 「らしさ」を植え付ける性教育

「権力関係」とあわせて問題になってくるのは、「女らしさ」「男らしさ」の役割分担です。被害者に女性が多いという問題は、ここに絡んでくるわけです。

最近女と男がボーダレスになってきているとよく言われますけれども、果たしてすべてがそうかというところ、「伝統的な価値観」というものはまだまだ残っていると思います。「女はおとなしい方がいい」と思われたりする。「男は弱音を吐いてはいけない。一人前にならないといけない」と言われたりする。男性として育てられてきた人の中には「男だから泣くんじゃない」と言われた人たちも多いと思います。競争社会で勝っていくために育てられていくわけです。もちろん、例外もたくさんあるかもしれないけど、まだまだ「伝統的な価値観」は多

いのではないかと思います。

このような「伝統的な価値観」が育まれる素地として、性教育の問題が挙げられます。みなさんは、どのような性教育を受けましたか。少し思い出してみてください。いまでは、様々な生き方をモデルとして提示する性教育が模索されたり、実践されたりしています。しかし、やはり旧態依然とした方法で、性教育が行なわれている現実が、まだまだあることも忘れてはならないことだと思います。最近の大学生や高校生の世代の話を聞いてみても、その多くは、私が小学生の頃に受けた性教育とあまり変わらないものだと気づかされます。

たとえば、私の受けた性教育をご紹介します。小学校高学年の頃、ある日、特別授業が開催されました。一学年合同で、女の子と男の子に分けて、体育館に集められるわけです。そこで、スライドを見せられながら聞いた話は、簡単に言えば「女の子の身体は将来、大事な人の子どもを産むために変化していく」という話でした。最後は「子どもを産むために、自分の身体を大事にしてください」という言葉で終わるわけです。今、考えれば、そこには「結婚をしない」という選択肢はな

い。「結婚しても子どもを産めない、産まない」という選択肢もない。「離婚」ということもないわけですね。そんな選択肢が与えられずに、ただ「女の子の身体は大事な人の子どもを産むために大事にしなければならない」というメッセージだけがインプットされていくわけです。「大事な人の子どもを産む」ことの強調は、その背景に、さらにメッセージを持ちつつ、発されます。女性の身体が子どもを産むためのものであり、その子どもは男性との結合によって——男性に「種」を与えられて——はじめて産まれることが可能だと教えられること。そこで提示される暗黙のメッセージは、女性の身体が、男性に従属する質のものであるというものです。そうやって、男性への「従属」がインプットされていくということになると思います。

◆ もうひとつの問題——性的指向について

この種の性教育において、もうひとつ欠落しているのは、性的指向 (sexual orientation) の概念です。性的指向とは、性的意識の向く方向のことを意味します。幼いうちに形成されていき、自分の意思では変更不可能な

ものであると言われています。性別で分けると、両極端には、異性に向く人と、同性に向く人が位置します。社会のなかでは、異性に向く人々——異性愛者——が数としては多いのですが、同性に向く人々——同性愛者——もいます。様々な調査をした人たちがいますが、同性愛者は、文化背景や歴史にかかわらず、人口の3～10%いると言われています。昨年の秋に、米国のギャラップ社という大手の調査会社が発表したものでは、20%という数字が提示されていましたが。

私はキリスト教の関連の仕事をしていた関係で、いろんなキリスト教会で話をするんですが、「この数と比較してください」という例示する数があるんですね。日本のクリスチャン人口です。日本のクリスチャンの人口は、現在、1%未満です。100人にひとり、よりも少ないわけです。これらの数字を手がかりにすれば、同性愛者に出会う確率は、クリスチャンに出会う確率の3～10倍ということになります。しかし、ここにいる皆さんも、日常生活のなかで、クリスチャンに出会うことはあっても、同性愛者になかなか出会うことができないことと思います。なぜかというと、同性愛者であることをカミン

グアウト（公言）することが難しい状況があるからです。まだまだ、私たちの社会には、同性愛者に対する偏見や差別がある。マスメディアでも嘲笑の対象になっているわけです。

もちろん、マスメディアだけではなく、私たちの周りには、同性愛者に対する嘲笑のまなざし、ことば、振る舞いは、多くあふれています。これら、性的指向の一方のみをあげつらうことも、セクシュアル・ハラスメントに入ります。

◆ 性情報のジェンダー差異

セクシュアル・ハラスメントの起こる背景に、「女らしさ」「男らしさ」のイメージや性別役割分担があると、先ほど、述べました。これらを支える一例として、性情報の女性と男性のあいだにある差異があります。たとえば、性産業——アダルトビデオ、ポルノ雑誌、風俗店など——を見ても、男性に対して女性がサービスをする産業が圧倒的多数です。「男は性に奔放である」という社会通念は、このような状況に支えられて再生産されていると言えます。

日本は他国と比べても、性産業に対して圧倒的に規制の緩やかな国です。私は、すべての性産業が「悪」であるという立場をとる者ではありませんが、一方で、ポルノ雑誌やビデオが氾濫する状況には、多くの弊害があるとも考えています。

たとえば、インターネットで「セクハラ」を検索したら、アダルト・サイトが多くヒットしたことを先に述べました。性産業の「ネタ」として「セクハラ」が使われているということです。ほかにも、深刻な問題として、「レイプ」シリーズが問題になったことがありました。実際に、出演する女優には、内容を知らされずに、レイプが行なわれているという現場もあります。セクシュアル・ハラスメントやレイプなどの犯罪が、このように性産業のなかで「シリーズ」として、「ネタ」として使用されるということは、事柄の深刻さや問題性を認識できない枠組みを作ってしまうのだと思います。

◆ 意識の差異——デイト・レイプ

このようにして刷り込まれた意識が、どのように現われるかという例を持ってきました。米国の大学の保健協

会がつくっているリーフレットです。新入生に配付するために作成されたものだそうです。タイトルは「デートは危険？ (Is Date Dangerous?)」。このリーフレットにはデート・レイプの事例が紹介がされています。女性と男性の意識の差がどれだけあるかを示す例として、少し長くなりますが、ご紹介します。エイミー（女性）とジム（男性）の物語です（牟田和恵『実践するフェミニズム』岩波書店、115頁から）。

まず、エイミーの言い分。

「ジムにはパーティで会ったの。とってもかっこよくて、しゃべりたかったんだけど、こっちからアプローチしてる、って思われるのはイヤだから、近づかないでいたの。すると、彼の方が私に近づいてきて、自己紹介してくれた。私たち、とっても話があって、彼って本当にいいなあって思った。だから、パーティを抜け出して彼のところで一杯やらないか、って誘われて嬉しかった。

大学寮内の彼の部屋に行くと、座ることはベッドの上しかなかった。ベッドの上になんか座ると、彼が変な気をおこさないか、ってちょっと気になったけど、でも、座るところはそこしかなくてしょうがなかった。私たち、

話してたんだけど、しばらくすると彼は迫ってきて、私はとても戸惑ってしまった。彼はまずキスしてきた。彼のこと、とてもいいなって思ってたし、キスまではよかった。でも、ベッドに押し倒されてしまって……私は怖くなって、一生懸命逃げようとして、やめて！って頼んだわ。でも、彼は力が強くて逃げるなんてできなかった。動けなくなってしまった私を彼はレイプした。

彼はすぐさま乱暴に私に入ってきて、とても痛かった。事が終わった時、彼は「いったいどうしたんだよ？」って、ぜんぜんわかってないみたいに私に聞いてきた。むりやりやたくせに、何とも思ってなかった！彼は、家まで車で送ってきて、また会いたい、とまで言ったわ。でもまた会うなんて考えただけで怖くなる。こんなことが私に起こるなんて考えたこともなかったのに……」。

次に男性側、ジムの言い分です。

「エイミーにはパーティで会ったんだ。セクシーな服装で、すごいナイスボディを見せつけてたよ。しゃべり始めたら、僕のこと見る目とか、話しながら僕の腕に触ったりするから、僕のこと気に入ってるってのは見え見え

だったよ。だから僕のところで一杯飲まないか、って誘って、彼女がオーケーしたとき、これはやれるぞ、ってわかってたさ。

部屋に戻って僕たちはすぐベッドの上でキスし始めて、とてもうまくいったんだ。でも、横にならせようとするると彼女は身体をねじって嫌だって言いはじめてさ。女の子ってのは、簡単に落ちると思われたくないもんだから、そんなことするんだよね。彼女もそのタイプってわけさ。抵抗するのをやめたとき、目に涙ためてたのは知ってたけどね。

終わった後彼女はとっても怒ってたけど、いったい何なんだよ！ セックスする気なかった、って言うんならなんで僕のところに来るのさ？ あのカッコといい、しゃべり方といい、彼女が処女なんかじゃなかったことは見え見えさ。それなのになんであんなに大騒ぎするのかね、ほんとにわかんないよ……」。

今、ざっと読み上げただけではなかなかわかりにくいと思いますが、ニュアンスだけ受け取っていただきたかったわけです。女性は起こった事柄をレイプだったと

認識しているわけですね。レイプされた上に家まで送ってきて「また会いたい」と言われた。「まさか、こんなことが自分に起こるなんて思わなかった」という言い分でした。そして、彼とは二度と会いたくないと思っているわけです。一方で、男性は、部屋に誘う時点で、「今夜はやれるぞ」と思っていた。そのために、女性が嫌がっていることを「簡単に落ちると思われたくないものだから嫌がる、身体をねじるということをするんだね」と認識しているわけです。

女性が「イヤだ」という信号を出しているにもかかわらず、男性がそれを受け取れなかった。それを「OK」の印だと全く正反対に受け取ってしまったという問題が起こっています。ひとつの事柄を通して、正反対の理解が生まれる。ここで二人は、コミュニケーションができない状態におかれているわけです。エイミーの「まさか自分にこんなことが起こるとは思わなかった」という言葉がありました。多くの人たちは「まさかこんなことが自分に起こるとは」と後で気づくことになってしまう。このような状況を起こさないためには、一緒にいる人が「No means No」という信号を読みとることが必要

なのは、言うまでもありません。つまり、未然に防ぐには「相手が望まない行動であるかどうか」を、加害者となる可能性がある人がよく考えていく必要があると思います。

しかし、実際にはなかなか難しい。とすれば、残念ながら、被害者となる可能性のある人が自己防衛することが、とりあえず必要になってきます。本来は、本末転倒な話ではありますが、レイプも含めて、セクシュアル・ハラスメントの対策・防止について、三点ほど最後にお話ししておきます。

◆ まずは「学習する」こと

まず一つ目に「相手が望まないこと」に想像力を働かせていく、ということです。これは、想像力という手法を「学習する」ということになるかもしれません。いろいろな人と出会っていくなかで、自分の意識を変えていくということですよね。相手がどんなときに傷つき、不快になるのかを絶えず考えていくことが必要だと思います。それまでに持っている情報だけでは補えない事柄、むしろ問題の生じる事柄が、たくさんあるということ

自覚しておく必要があると思います。そのためには、なるべくいろんな価値観を持った人と対話をして、コミュニケーションをとっていくことが必要なのではないかと思います。加害者になりやすい人という分け方は、あまりしたくはありませんが、「加害者になるかもしれない」という気持ちをどこかで持ってほしい。人数が多い方に自分が属しているとき、少数者の人たちは何を考えているのか。自分が先輩になったとき、後輩たちは何を考えているのか。そんなことを考えてほしいと思います。

◆ 「ノー」と言える環境づくり

二点目に「ノーと言える環境づくり」が大事だと思います。これは非常に微妙な問題なんですね。セクシュアル・ハラスメントの問題は、被害にあった人が告発しないと、同じような事柄がまた繰り返されていくとよく言われます。しかし、被害者はとても嫌だった経験を人に話すことは難しい。そのときのことを思い浮かべながら話をしないといけないからです。嫌なことに直面したとき、そのことをできれば忘れ去ってしまいたい、記憶から抹消してしまいたいという気持ちが起こります。だから

ら、被害を誰かに話すこと、また告発することは、とても困難なわけです。その困難さを踏まえた上で、「ノー」といえる環境づくりをしていかなければならないわけです。

「ノー」と言える環境づくりは、同時に、周りの人々が「これは嫌なことなんだと感じている、言おうとしている」ということに「寄り添う」ことでもあります。寄り添う「勇気」が周りの人々に必要だと思います。なかなか「嫌だ」「ノー」と言えない状況があると思うんです。

先のエイミーとジムの事例を、ふたたび振り返りましょう。エイミーはレイプだと認識していたわけですが、ジムに家まで送ってもらった。このような場合、周りの人々は、彼女を咎めるわけです。「エイミーが部屋に行かなかったらそんなことは起こらなかったのではないか」、「なぜ力づくで逃げなかったのか」、「ましてや車で送ってもらうなんて」と。そうすると、本来、犯罪として認識されるべき事柄が、被害者の「落ち度」ゆえに起こった事柄として認識されることになってしまいます。そうすると、被害者は自分の責任を責めるしかなくなり、解

決とはほど遠いところに置かれてしまうわけです。

起こった事柄に対して、まずは被害者の立場に寄り添うこと。周りの人々が、その人の「ノー」を読み取っていき、一緒に「ノー」と言っていけるような人間関係づくり、コミュニケーション能力を養っていくことが必要になると思います。

「ノー」と言えなかった例、「ノー」というメッセージが伝わらなかった例をもう一つ挙げておきます。大阪地方裁判所で2000年8月に判決が出たものです。皆さんも覚えておられるかもしれません。当時の大阪府知事・横山ノックがセクシュアル・ハラスメントで訴えられました。彼は告発されたことに対して、それを名誉棄損だととらえ、逆に、告発した人を訴え返しもしました。横山ノックにセクシュアル・ハラスメントを受けたと告発した人は、彼の選挙活動の最中にアルバイトに入っていた女性でした。横山ノックに身体を触られるという事件が起こったわけです。

彼女は「最初、何が起きているのかわからなかった」と証言しています。自分はアルバイトで雇われている身で、相手は横山ノックという有名人です。知人の紹介で

アルバイトに入った。「一瞬何をされているかわからなかった。声を上げることかできなかった」。そういう証言があります。「嫌だ」ということを言えなくて、「ただ身体を固くして、それ以上触られないように拒否するしか仕方がなかった」。そして、拒否する気持ちを態度で示そうとした。彼女が「嫌だ」というメッセージを発したのは「トイレに行きたいんです」という一言だったんですね。「トイレに行きたいんです、行かせてください」と言って、その場を離れる方法しかなかったそうです。「この場を今、離れたたいということを示したら、横山ノックは嫌がっているということをきっと気づいてくれるだろう。ノーと言っていることをわかってくれるだろう」と思っていたそうです。被害者の人はそういう証言をしています。

ところがここでも大きな勘違いが起ってしまうわけです。横山ノックの側に勘違いが起るわけです。彼は「はっきりした抵抗はなかった。まさか本人が本当に嫌がっているとは思わなかった」と弁明し直すわけです。「嫌だったら嫌だと言うはずだ。もっと激しく拒否したはずだ」という見方で横山ノックは弁明していくわけで

す。だから腹が立って逆に名誉毀損で彼女を訴え返すわけです。

しかし、ここで少し考える必要があります。本当に恐怖に晒されたとき、人は声をあげることもできない。ましてや、咄嗟に行動がとれないことはたくさんあると思うんです。「足がすくむ」という経験ですね。そういう現実を認識しておかないと、コミュニケーションがとれない状況に置かれてしまう。拒否している態度が、正反対に受け取られてしまうことが起こっていくということです。横山ノック事件も、「ノー」が伝わらなかった例です。「No means No」、嫌というのは本当は嫌がっているということなんだということが伝わらなかった。加害者側は「ノー」というメッセージを受け取らなかった例だと思います。

◆ 誰かに伝えることの必要性

セクシュアル・ハラスメントが起こったとき、誰かが「ノー」というメッセージと一緒に受け取ってほしい、寄り添ってほしい、と先ほど述べました。それは、被害者を孤立させないためです。そして、被害者となった場

合は、必ず、誰かに相談することが必要だと思います。

皆さん、大学に入学して、これから新しい人間関係ができていくわけです。いろんなことが起こってくると思います。よいことも、悪いことも、悲しいことも、泣きたくなることもあると思います。そういうなかで、いろいろな話ができる関係性を育んでいくことが大切だと思います。人と人をつないでいく想像力、それをコミュニケーションをとりながら育んでいく。

花園大学でもセクシュアル・ハラスメント事件が実際に起こっています。職員間での事件です。そのために、昨年の後期から新しく設置された「安心ひとりぐらし」という特別講義があります。私が担当して、おもにセクシュアル・ハラスメントについて、お話ししています。その講義の後、昨年も、数名の学生さんに、教員から、コンパの席で身体を触られた、お酌を強要された、という経験を聞きました。つまり、花園大学では、公になったのは、職員間での事件でしたが、それは氷山の一角にすぎないということです。そのひとつの事件の背後には、もっともっとたくさんの、明るみに出ない——被害者が泣き寝入りさせられている——事件があるということで

す。いつのまにかうやむやになって、隠されて、消されていってしまうことがたくさんあるのだと思います。

たとえばゼミで、授業で、クラブ活動で、クラスで、アルバイト先で、何か事が起こったとき、誰かに相談するようにして下さい。リーフレットにも載っていますが、学内に教職員の相談員がいます。そういう人たちに相談することも一つの方法だと思います。

しかし、学校でセクシュアル・ハラスメントの被害にあった人たちに「学内の相談員の人に相談してください」と言うことほど難しいことはないんですね。学校で起こった事柄を学校の人に言えるもんかという思いを持つ人たちがほとんどだと思います。そういう場合には、今はいろんなところに、公的機関にも相談窓口がありますので、そういうところに相談してほしいと思います。どこかに出掛けて行って、わざわざ相談するようなことはできないと思う人もいるかも知れません。その場合には、友だちに相談してみる、そういう友だちをつくっていくことが、まず一番最初に必要なことだと思います。

◆ さいごに

〈ディスコミュニケーション〉とは、想像力が断絶していくこと。断絶させられていくことだと思います。断絶され、分断された回路をつないでいくことが、コミュニケーション、対話の一番大事な部分です。最初に、アメリカによるイラク攻撃の話をしました。これも同じ線でつながっていると思うんですね。私たちは空母から飛び立つ戦闘機の映像を絶えず流され、自分たちの中にインプットさせられていく。積み込まれていく爆弾の映像を見せつけられていく。それは、つねに爆弾を飛ばす側の視点です。ずっとそういう映像を流されていると、その爆弾がどこに落ちていくのか、落ちたところにどんな人々の表情があるのか、その人々がどうやって生まれて、どうやって死んでいくのか……そういう想像力を馳せられない状況に慣らされるしまうわけです。そこにも想像力を断絶していく、分断していく装置が働いているんだと思います。

想像力を育むというのは、人との出会いからしか生まれないと思います。私はいくつか大学に行ったり、中学とか高校とかにお話に行きますが、多分、花園大学とい

うのは出会いの宝庫なんじゃないかなと思っています。週に一日しか来ない非常勤講師の私が「花園大学はこういう大学だ」と話をできる立場ではないかもしれません。今後、ここにいる皆さんから「花園大学はこんなところだ」と教えてもらうことを期待しています。ぜひ、いろんなところで出会いというのを大事にしてもらいたいと思います。少しでもディスコミュニケーションの恐怖を取り去っていくこと。そこに介在してくる暴力の問題を排除していくこと。糸と糸をつなぎながら出会っていくことを大事にしてもらえればと思います。

長い間、ご清聴ありがとうございました。以上で終わります。

堀江先生に感謝

セクシュアル・ハラスメント事件の被害者の大部分は女性です。それというのも、堀江先生のお話にもあったように、セクシュアル・ハラスメントは権力関係を基盤にして発生する性差別という性格を本質的にもっているからです。ここにいる男性の学生は「オトコの俺には関係ない」と思っているかもしれませんが、そうではありません。ひょっとすると加害者になってしまうかもしれない自分自身への想像力を働かせて下さい。また、「オトコらしく」育ってしまった自分自身を批判的にとらえかえす視点ももってほしいと思います。

冒頭に述べたように、全学調査によっても、本学にいくつかの問題が存在するという残念な事実が判明しました。学生・院生についての調査報告書ができあがりますので、関心のある方は学生課の窓口または人権教育研究センターにお出でいただければ、差し上げます。

ここで、人権教育研究センターについてお知らせします。裁松館の4回にあるセンターを有効に利用して下さい。図書の出借や研究の相談などに応じたりもします。

が、このセンターは人間と人間の出会いの場としても有意義に機能していると思います。ここにお出になれば、教員、職員、学生、院生がそれぞれの立場性とは無関係に、非常に重要な話題からおよそバカバカしい話題まで、口角泡を飛ばして議論している奇妙な空間です。といって、別にその議論に加わる気がなければ、黙って座っていてもいいのです。キャンパスの狭い本学では、学生の単なる居場所としての意味もあるようです。まあ一度、ともかく顔を出してください。運がよければ、コーヒーの一杯くらいにはありつけるかもしれませんよ。

それでは、堀江先生に感謝しながら、この場をお開きにしたいと思います。堀江先生、どうもありがとうございました。(八木)

